

深沢克己著

『商人と更紗』

—近世フランス・レヴァント貿易史研究—

君塚弘恭

近年の日本の歴史研究において、「ヒト・モノ・情報」の移動に焦点をあてた研究が成果をあげつつあることは疑いないだろう。それは、日本海、インド洋や地中海、大西洋空間における海域史、中央アジア陸上交易史と結びつき、「国際商業史」を構成する。それらの研究は狭義の「日本史」や「東洋史」、「西洋史」という枠組みを超えて多様な商業空間、商人社会のあり方を解明している^①。他方で、こうした研究の動向は、「世界システム論」の影響を受けつつ、「世界史」構築に向けた歴史学方法論の一つとしても重要な部分を構成する。^②

深沢克己氏は、言うまでもなくこの国際商業史研究を牽引してきた研究者の一人である。本書は、深沢氏がこれまで行ってきた一八世紀フランスのレヴァント貿易（東地中海地域との貿易）に関する研究成果であり、地中海世界で活動した貿易商人と流通した商品という切り口から国際交流史を描いている。それは、現時点におけるレヴァント貿易史、ひいては国際商業史研究の到達点

を示す。しかし、本書の成果は、商業史に限らず、歴史研究の様々な分野に接続される魅力的な要素を含んでいる。私が本書を紹介し、評しようとする動機はここにある。

まず、本書は次のような構成である。

序

第一部 商人社会の力学

第一章 ヨーロッパ商業空間とディアスポラ

補論 ディアスポラの現在

第二章 マルセイユ都市空間と商人共同体

第三章 レヴァントのフランス商人

第二部 商品交易と技術伝播

第四章 レヴァント綿布貿易の成長と変動

第五章 レヴァント更紗とアルメニア商人

補論 シャファルカニ更紗・その後

第六章 ラングドック製毛織物の輸出貿易

第七章 自由港制度と更紗禁制

第八章 プロヴァンス地方における更紗の密輸と地域内商業

内容の紹介に移りたい。

序論においては、本書における問題の所在、研究の方法とその意義が述べられる。たしかに一八世紀においては大西洋貿易の比重が増大するが、地中海商業は、ヨーロッパ国際商業のメカニズム全体の中で不可欠な要素であり続けた。それゆえ、本書では、

近世フランスのレヴァント貿易をそれに関わる商人と商品（輸入品として綿布・輸出品として毛織物）に着目して分析し、「国際商業の社会文化的意義」を考察する。第一部では、レヴァント貿易を考察する前に、この商業空間を支えた商人共同体が総合的に検討される。第二部はよりレヴァント貿易に密着し、フランスのレヴァント貿易を独占したマルセイユと代表的な取引相手であったアレppoをとりまく貿易構造、更紗製造技術の伝播、更紗の地域内商業が考察され、レヴァント貿易に参加した様々な商人、国際商業網が明らかにされる。

第一章では、宗教的迫害によって離散したディアスポラの商人が、国際商業との親和性から考察される。ここで対象とされるのは、セファルディム（イベリア半島出身のユダヤ人）、アルメニア人、ユグノ（亡命プロテスタント）、ジャコバイト（亡命アイerland人）、ギリシア人である。彼らは親族集団を基礎とする同宗派共同体を形成し、分散した同胞どうし、および故郷とを結びつける緊密なネットワークを作り上げる。この離散共同体を武器にして、ディアスポラ商人たちはヨーロッパ国際商業の展開に貢献した。補論においては、ディアスポラと政治権力との関係などのディアスポラ研究の課題が提示され興味深い。

第二章の叙述の中心は、都市の構造と商人共同体の性質である。例えば、マルセイユは「地中海港」に分類され、市壁構造や都市の空間構造からみれば海に向かって開かれる。また、マルセイユの国際商業はヨーロッパ内貿易とレヴァント貿易の二つから構成された。前者は、スイスや北西ヨーロッパ出身者によって担われ、マルセイユの商人共同体は、彼らに対して開かれた。しかし、後

者はマルセイユ商人によって独占され、競争者となるユダヤ人やアルメニア人はマルセイユ商人共同体から選択的に排除されていた。このように、商人の活動は海港都市の性質を決定する要因となった。

第三章では、まず、近世レヴァント貿易の構造について概観される。一七世紀における胡椒から生糸への変化はアレppo、リヴォルノを台頭させる。ところが、一八世紀に生糸から綿花へ主要商品が変化すると、これらの都市は後退し、イズミルとマルセイユが発展をとげる。貿易商品の变化は貿易の担い手となった離散商人共同体の変化と連動した。生糸貿易は離散したアルメニア商人によって掌握されるが、綿花貿易ではギリシア商人が主役になる。次に、アレppoを事例として商人共同体どうしの力関係が述べられる。アレppoでは、非ムスリム商人の一部がヨーロッパ諸国領事の「被保護民」となって遠隔地貿易に従事し、ムスリム商人との競争において優位に立ったが、同時に、彼らはヨーロッパ商人の競争者でもあった。また、フランス商人がレヴァント市場商品価格と品質の統制に失敗した事例は、彼らの影響力の限界を示す。

第四章では、レヴァント綿布貿易が概観される。一八世紀のレヴァント市場においてフランスはイギリスを圧倒するが、この商業はマルセイユ商人によって担われた。彼らは、ラングドック製毛織物やオーストリア製銀貨を輸出し、その「帰り荷」として、イズミルで綿花や綿糸、アレppoでオスマン帝国製更紗を買い付けた。レヴァント更紗は南フランスに浸透し、ヨーロッパの商業空間の観点からみれば、喜望峰回りで北西ヨーロッパに到着した

インド更紗に対抗した。

第五章では、著者が文書館で発見した更紗の見本帳を手がかりにして捺染技術伝播の謎にせまる。まず、発見された見本帳からヨーロッパ製捺染更紗とディヤルバクル製「ジャファルカニ」との関係が確定される。次に、このジャファルカニの起源は西北インドで二枚の木版を用いて生産された捺染更紗「ジャフラカニ」であり、レヴァント地域を経てマルセイユに到達したことが示される。こうして、長期にわたり謎につつまれていた、西北インドからヨーロッパに至る「更紗の道」が実証されたのである。また、この技術の伝播はアルメニア人たちにより実行され、離散共同体のネットワークが捺染技術の伝播に重要な役割を果たしたことが明らかになる。巻頭数頁に掲載されている色鮮やかな更紗の写真とジャファルカニ更紗に関する補論は、第五章の内容に説得力を持たせると同時に、商業史を語るうえで商品に関する知識がいかに重要かを私たちに伝えている。

第六章では、毛織物貿易の構造と変動が明らかにされる。マルセイユからレヴァントに輸出された毛織物の主要な生産地はラングドックであるが、製造業者は、資金面でマルセイユ商人に全面的に依存した。輸出の変動は、四つの局面に分けて分析され、マルセイユの輸出が順調に伸びる一方、レヴァント地域における輸入は必ずしも順調ではなかったことが明らかにされる。一七八八年以降、価格低下による毛織物輸出の伸び悩みが顕著となり、マルセイユ商人は投機先を毛織物から銀貨輸出に変え、毛織物製造業者とマルセイユ商人の伝統的関係は崩壊した。

第七章では、マルセイユ商業界と王権の政策との関係が論じら

れる。一六六九年に出された自由港王令によりマルセイユはレヴァント貿易を独占する特権を得るが、一六八六年から実施される「更紗の輸入と消費の禁止」はこれを部分的に否定した。しかし、マルセイユは、一七〇三年、商業会議所による抗議行動の結果、自由区域内でレヴァント更紗を流通させる特権を得る。その結果、更紗禁制下でのレヴァント綿布貿易の拡大と捺染業者の成長が実現された。しかし、一七五九年に更紗禁制が廃止された後も商業会議所はレヴァント貿易特権の維持に固執し、結果的に、国際商人ネットワークに支えられて白綿布の自由な輸入を求める地元捺染業者と対立する。その背後に、マルセイユの「閉鎖性」と「国際性」を読み取れる。

第八章は、更紗の密輸記録を史料として地域内商業と国際商業の結びつきを描き出す。マルセイユの商人、捺染業者はエクスに工房を建設し、そこまで外国製あるいはマルセイユ製の更紗を密輸し、エクスの製造印をつけて販売した。こうして、彼らは、自由港制度によって課せられる高関税を逃れ、大量の密輸品をプロヴァンスやラングドックで販売することができた。その結果、更紗は南フランスに浸透する。さらにプロヴァンスに持ち込まれた更紗の流通経路をさかのぼるならば、それは、マルセイユ・アレppoの伝統的レヴァント貿易のみでなく、ヨーロッパ捺染業とインド洋貿易を結ぶ国際事業網に接続される。そして、それを可能にしたのは、ユグノの離散ネットワークだった。

本書は深沢氏が一九八四年にプロヴァンス第一大学に提出した博士論文をもとにしているが、この博士論文は、近世レヴァント

貿易研究を多面的に分析したものととして現在でも高い評価を得ている。したがって、その問題意識を継承し、現在の研究動向をふまえて自身の研究成果の集大成として世に問われた本書が、今後この分野を研究するうえで参照され続けることは疑いない。実際に、私は近世フランスの大西洋沿岸に位置する港町を主なフィールドとして様々なレヴェルの商取引について研究しているが、多くの点で深沢氏の研究から影響を受けている。しかし、本書の内容についていえば、私自身の研究課題との関連からいくつかの疑問が残ることも事実である。本書の意義をより明確にし、今後の展望につなげるために、以下では、本書の課題を次の三点に示して論じたい。

一つ目の論点は、レヴァント貿易の構造を分析することから導かれた地中海世界の広がりについてである。まず、深沢氏は、一八世紀におけるアレppoとマルセイユの貿易構造とその変化について具体的に解明した。たしかに、本書はトルコ語の史料を参照していないが、私は、これは本書の大きな欠点とはならないと考える。それは、次の二つの理由による。第一に、深沢氏は、オスマン帝国に関する最新の研究を慎重に検討してフランス側のデータと突き合わせている（例えば本書第三章）。レヴァント市場の動向を論じるにあたり、たしかにフランス語史料のみでは不十分とする意見にもうなずける。しかし、もし、トルコ語で利用できる広域商業に関する史料が少ないならば、商人でもあったアレppo領事によって残された文書のほうがトルコ語の行政文書より適切であると考えられる。これが、第二の理由である。もちろん、更紗技術の問題についていえば、トルコ語やアラビア語の史

料を参照できるならば、本書の可能性はさらに広がるのであって、それは深沢氏自身も自覚しているところである。

また、従来の国際商業史研究で、地中海世界や大西洋世界における国際事業網が問題にされることはあっても、それらの関係が特定の商品から具体的に論じられることは少なかった。しかし、本書は、マルセイユと東地中海との綿布貿易構造を中心としながら、そこに加わるオランダやドイツ、スイスなど国際的商人ネットワークの存在も明らかにしている。これらの商人たちは、ヨーロッパの更紗製造業発展に寄与しただけでなく、喜望峰回りで展開する大西洋沿岸諸港のインド貿易と地中海商業とを結びつける働きもしたのである。

このように本書は、地中海世界を魅力的に描き、特にマルセイユとアレppoの綿布貿易については、ほぼ完璧に論じたと考えてよい。しかし、イタリアの役割や大西洋側との関係を目を向けるならば、次のような疑問を提示することができる。イタリアに関していえば、深沢氏は、アレppo市場の事例研究において、現地織物商人とフランス商人をつなぐ仲買人としてのユダヤ人の影響力と、東西のユダヤ人が合流するリヴォルノの重要性を指摘する。しかし、レヴァント貿易における重要性が指摘されているにもかかわらず、綿布貿易と更紗製造を扱う第四章と第五章ではほとんどリヴォルノについて述べられていない。ところが、第六章では、毛織物貿易の中継港としてのリヴォルノの役割が再び重視される。このように見ると、この都市が綿布貿易においてどのような役割を担ったのかという疑問がうかんでこよう。また、レヴァント綿花のルアンへの輸出とサンマロ船の役割について述べてい

るが、これは大西洋側におけるサン・マロ商人の活動が相対的に衰退する一八世紀後半にも言えるのだろうか。リヴォルノの商業活動の実態やジブラルタル海峡を超えて活動するサン・マロ船の果たした役割が解明されるならば、東西世界の文化交流における地中海世界とレヴァント綿布貿易の意義はさらに深まるだろう。

また、プロヴァンス地域内商業という観点からは、マルセイユと近隣の港との関係にも注目すべきだろう。たとえば、ブルターニュにおいては、ナントやサン・マロといった大貿易港の活動をベル・イルやキプロンなどの小さな港で機装された中型船による沿岸貿易が支えた。深沢氏は更紗の密輸におけるセツトとニースの役割を指摘したが、これらの港の活動がより深く分析されるならば、地中海地域内部における更紗の流通についてより深い知識が得られよう。

第二の論点として、本書が提示した国際商業を説明するうえで不可欠な二つの要素をあげることができよう。すなわち、ディアスポラと海港都市の類型である。本書の大きな特徴の一つは、国民経済史では無視されがちなディアスポラの商人を国際商業の重要な担い手として考察している点である。彼らは、自らの持つ国際事業網を武器としながら、国際的な商人や技術の伝達者としてアジアやヨーロッパ経済の拡大に貢献した(第一章)。また、彼らの存在は本書全体に見られ、地中海世界はアルメニア人やユダヤ商人、プロテスタント商人の活動が交差する十字路となる(第四章、第五章、第八章)。他方で、港における彼らの活動は、都市の閉鎖性に関わるので、海港都市の類型と関連する。深沢氏は、マルセイユとナントやルアン、ポルドー、サン・マロなど大西洋

沿岸港とを比較し、「河口内港」「沿海岸港」「地中海港」として明快に分類した。「河口内港」やマルセイユなど一部の「地中海港」では、貿易構造に対応して、商人共同体の中にディアスポラの商人を含む外来商人が参加した。これらの要素は、これまでの日本における経済史研究で見落とされてきた部分である。海港都市における外来商人の活動は、今後、ヨーロッパ史のみでなく、例えば、中国人や日本人の影響を受けたとされる東アジアや東南アジアの海港都市を説明するうえでも考察対象として不可欠なろう。

現在のディアスポラ研究の状況と課題についてはすでに補論で説明されているが、この研究を深める観点として次の二点を加えることができるだろう。まず、政治権力との関係からいえば、特定の事件に離散共同体を直面させて考察することである。離散共同体の存在を積極的に導入する利点の一つは、国際的連関の中の歴史的考察を可能にすることであり、そうすることで、政治権力争いを国際的な文脈で読みかえることが可能になる。例えば、ポルドーのプロテスタントたちは、亡命ユグノとのネットワークを利用して、フロンドの乱の際にイングラントに援助を求めようと画策した。この都市におけるフロンドの乱は国際的宗教対立関係の一面でもあった。次に、商業史の文脈でいうならば、なぜ離散共同体が国際事業網の中でかくも重要な位置をしめることができたのかという問いを忘れてはなるまい。その際、本書でもふれられている技術や情報の伝達という観点は参考になるだろう。こうしてディアスポラ研究は、商業史の枠組みを超えて、政治史や文化史、国際関係史を豊かにするのである。

第三に、本書が貿易収支の測定にとどまることなく、技術の伝播や流通の実態という側面に着目し、更紗の流通を文化的次元で論じたことを取り上げたい。

更紗の道は、インドから地中海経由と喜望峯回りでヨーロッパに到着すると同時に、日本の彦根にも達する。こうして、インドを中心として更紗をめぐる東に広がる文化交流史の可能性が示される。本書の成果をインド洋世界や東シナ海世界に関する諸研究とつぎ合わせるならば、将来的にはユーラシア大陸の周辺に展開する海洋世界の歴史を描くこともできよう。また、オスマン帝国やベルシアは単なる更紗の技術の通り道ではなく、ヨーロッパと対等に取り引する工業地域であった。世界システム論に基づくオスマン経済の周縁的イメージはこうした事実をふまえて塗り替えられねばならない。

また、本書は、更紗文化の広がり論じるうえで、消費の側面にも着目する。第五章と第八章では、西ヨーロッパやプロヴァンス地方における更紗の消費について興味深い分析がなされている。とりわけ、プロヴァンス地方における密輸更紗押収の事例は、一定の需要がこの地域にあったことを示す。

しかし、更紗の流通と消費に関して、次の二点をより具体的に分析する必要があると考えられる。まず、地域レヴェルの問題であり、これは遺産目録や商人文書の総合的な分析を通じて深める必要がある。本書では、プロヴァンスにおける流通構造が述べられているが、消費者の手に渡るまでは考察されていない。本書は、売り手側からの論述にとどまっている。しかし、更紗の文化的史的意義を強調するのならば、粗悪品も含めた更紗の消費を論じなく

てはならないだろう。こうした問題について、近年、フランスではロリアンやポルドーなどで研究が進められている。公証人史料の総合的分析や服飾史の成果を反映させつつ、国際的に比較しながら、更紗の消費についてさらに解明されることが望まれる。

次に、北海・バルト海域から東ヨーロッパにおける流通構造の問題である。本書では、テッサロニキなどバルカン半島の海港都市がレヴァント貿易全体を論じる際に問題にされ、また、ポランドへ向かう更紗の道についても指摘されている。しかし、これらの地域において、更紗技術がどのように浸透したか、あるいはどのような流通構造を持ち、それらは国際商業の中にどのよう位置づけられるかといった具体的な問題は未解明のままである。これらの研究は、更紗の流通と消費についてヨーロッパ規模で比較検討することを可能にし、「綿と更紗の時代」の一端をより具体的に説明するだろう。

さて、私なりの疑問点を指摘してきたが、著者の意図を十分に汲み取れているか、誤読を重ねていないか危惧している。また、紹介部分で、私は、論旨のみを抽出しよう心がけたので、具体的な商人の活動について深く立ち入ることを避けた。しかし、本書の本当の魅力は論旨のみにあるのではなく、具体的事例を通じて近世ヨーロッパとアジアを結ぶ商人たちのダイナミズムを私たちに実感させてくれることにある。多くの人によって本書が読まれることを切に願う。

① この点については、深沢克巳『海港と文明』（山川出版社、二〇〇二年）。

② 日本における「世界史」研究の一例として、南塚信吾氏らによる「世界史研究所」の活動がある。http://www.history.ichiba-u.jp/~riwapanese/

③ 沿岸貿易 (Le cabotage) にいって、各港に因する個別研究は、エルで蓄積があるものの、本格的な総合は私の知るかぎり多くなく、今後の課題である。この点は、地中海沿岸貿易研究の一例として次の論文をあげたいことである。G. Buti, «Aller en caravane : le cabotage lointain en Méditerranée, XVII-XVIII siècles», *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, n°52-1, janvier-mars 2005, pp. 7-38.

④ S. Marzagalli, «Atlantic trade and Sephardin merchants in eighteenth-century France: The case of Bordeaux», in P. Bernardini and N. Fiering(ed.), *The Jews and the expansion of Europe to the West, 1450 to 1800*, Berghahn Books, 2001, pp. 268-286.

(A5判四六四頁十國版六頁二〇〇七年十一月)

東京大学出版会 税別六八〇〇円
(京都大学大学院文学部研究科博士後期課程)